中に立つ　森岡政子

李禹煥（リ・ウーファン）は、私の最初の評論集『万葉へ』の装幀をしてくれた人。日本およびヨーロッパで活躍する韓国人画家である。紫綬褒章受章のときにいっしょになり、ひさびさの出会いを話し合った。「贅沢な余白と濃淡」は、彼の作品の特色をうまく言い当てている。安藤忠雄といっしょにつくった贅沢な美術館は香川県の直島にある。

丘（モーホ）とは貧民街と同義語のリオ・デ・ジャネイロは丘多き町　松岡秀明

研究者としてブラジルにしばしば行っている作者ならではの一首。「モーホ」はポルトガル語だろう。貧民街が多いのか。まだ見ぬ都市への好奇心が刺激される。

カーブなす駅の電車のドア開きすつぽり落ちよと誘ふ淵あり　荻野美佐子

こういう思いで隙間をまたぐ人もいるのだ。「淵」という古い語が新しいひびき方をしている。

この先は絶壁だろうとわかってるあなたの愚痴はとても複雑　川又和志

深刻な愚痴ではない。立ち話のような気軽な場面の人間関係をさらっとうたった気合い。「とても複雑」という口語表現が、軽さを実現している。

百年後やさしく批判されながら読まれてゐたり『遠野物語』　本田一弘

全国大会の赤坂憲雄氏の講演に取材。『遠野物語』を主語にし、百年前に時点をもどした工夫がポイント。

東北の上空をゆくまたいではいけないものを跨ぐ心地に　古川典子

全国大会へと九州から東北へ飛行機で行くときに取材。震災地への思いをこういう表現でうたった作ははじめて読んだ。取材角度がいい。

鳥たちは北上川を高く越え吾は浮き立つ朝迎えおり　越智敦子

これも全国大会。一人部屋は町側だったが、大きな部屋は北上川の流れを広く見渡せた。そんな部屋での朝である。上句から下句への流れが、いい。

四人分五日分の洗濯終わりああ夏の旅が終わってしまった　堀越貴乃

北上全国大会子供連れ編である。洗濯物で旅をうたった取材のユニークさ。

全国大会の歌、他にも面白い作が多くあった。

縦横の傷あまたあるみちのくの鬼剣舞の汗したたれり　中西由起子

北上の地に我が体一夜置き短歌の宴の夏は終りぬ　武富純一

廃されし旧き花巻松雲閣裏山にざざと赤松鳴れり　経塚朋子